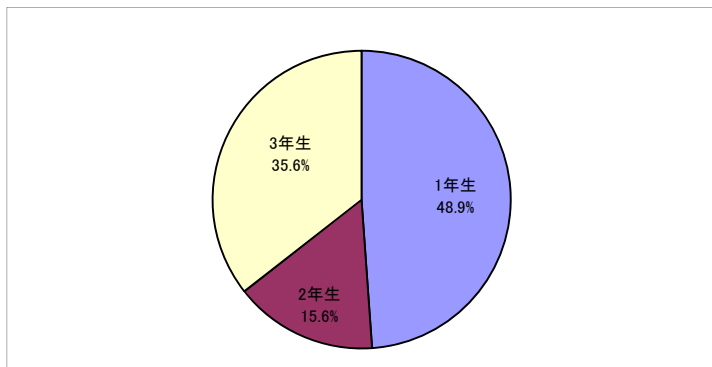


中学校・環境教育に関するアンケート集計結果(四国)

アンケート調査実施: H22年度
集計対象: 徳島市・高松市・松山市・高知市の中学校 86校

【設問1】

(1) 全学年の中で、最も重点的に環境教育を実施している学年は？



◇複数の学年を回答した学校があったため、N=90(回答数合計)とした。

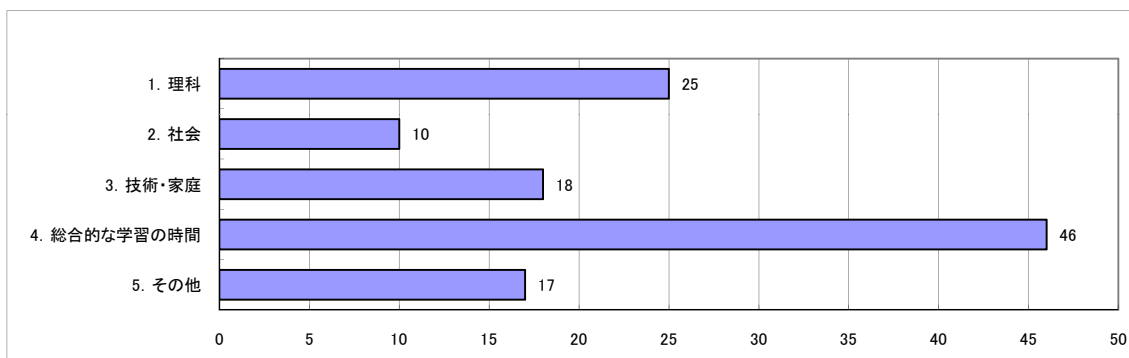
最も回答が多かったのは1年生で44校(48.9%)と約半数であった。次いで3年生が32校(35.6%)、2年生が14校(15.6%)であった。

以下、最も重点的に環境教育を実施している学年について回答を求めた。

(2) 環境教育は何の科目／授業として行っていますか？次の1～5の項目(グラフ参照)から選んでください。複数可。

◇N=116(各科目の回答数合計)

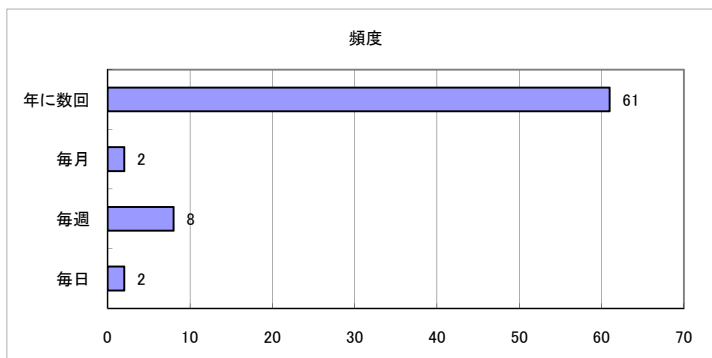
最も回答が多かったのは総合的な学習の時間で46校(39.7%)であった。次いで理科が25校(21.6%)、技術・家庭が18校(15.5%)、社会が10校(8.6%)であった。その他の回答が17校からあり、生徒会活動・学校行事・クラブ活動などの課外授業、国語・保健体育や学校の教育活動全体を通じて行っているとの記述があった。



(3) 環境教育の実施頻度、時間数はどのくらいですか？

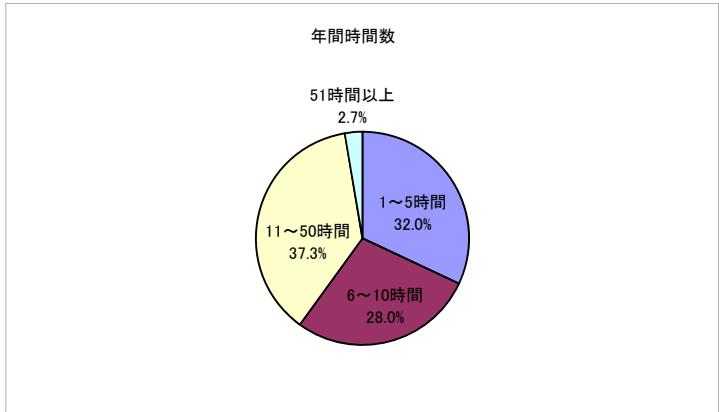
(年 回、毎月、毎週、毎日)

合計 時間(年間)



◇N=73(回答校数)

年に数回との回答が61校(83.6%)と約8割であった。毎月が2校、毎週が8校、毎日が2校であった。



◇N=75(回答校数)

年間の時間数は、11~50時間との回答が最も多く28校(37.3%)、次いで1~5時間が24校(32.0%)、6~10時間が21校(28.0%)であった。51時間以上実施している学校が2校あった。

(4) 環境教育における主なテーマをご記入ください。

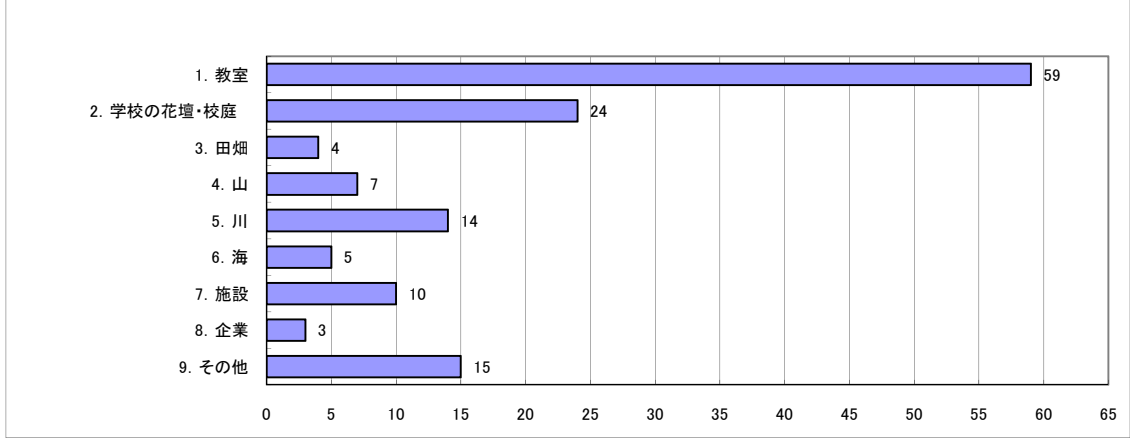
地域社会の特性から身近な環境の課題を知る学習、節電・節水やゴミ分別・リサイクルなど省資源のための具体的な活動、環境美化活動、消費生活について考えるものなど、多様な切り口のテーマが設定されている。また、学習によって「現状を知る」「豊かな心を育てる」「解決方法を考える」「環境に対する意識を高める」など期待する効果を盛り込んだものも見られた。以下にテーマに関するキーワードを抽出した。

- 地球環境（温暖化、酸性雨）
- ゴミ（減量、リサイクル、調査、不法投棄問題、廃棄物処理）
- エネルギー（節電）
- 水（水環境、節水、川）
- 環境美化（校舎校庭の清掃・花いっぱい運動・緑化、地域のゴミ清掃、EM菌）
- 消費生活（グリーンコンシューマー、エコクッキング）
- 自然環境（森林、瀬戸内海、近くの川、山・川・海のつながり、生態系、植物育成）
- 地域社会（校区の歴史・環境、漁法と漁業資源、地域の人との交流）

(5) どのようなフィールドで環境教育を実施していますか？次の1~9の項目(グラフ参照)から選んでください。複数可。

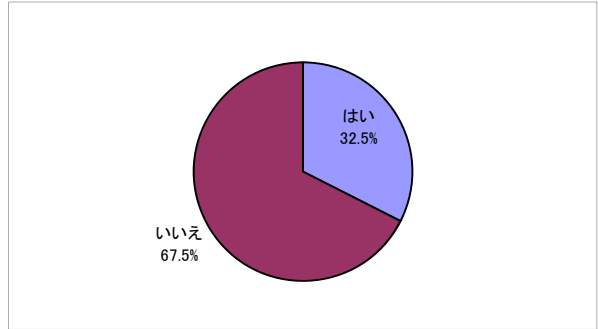
◇N=86

教室との回答が59校(68.6%)からあり、約7割が教室内で環境教育を実施しているほか、学校の花壇・校庭も24校(27.9%)に上った。野外では、川が14校(16.3%)、次いで山が7校(8.1%)などで、田畑・山・川・海といった自然環境をフィールドとしている学校は合計で30校(34.9%)であった。施設や企業でもそれぞれ10校、3校が実施していた。その他として、校区内の道・公園、ダム、修学旅行の訪問先などの回答があった。



【設問2】

(1) 環境教育の実施にあたり、外部(企業、公民館、NPO、環境アドバイザーなど)の協力を得ていますか？



◇N=77(回答校数)

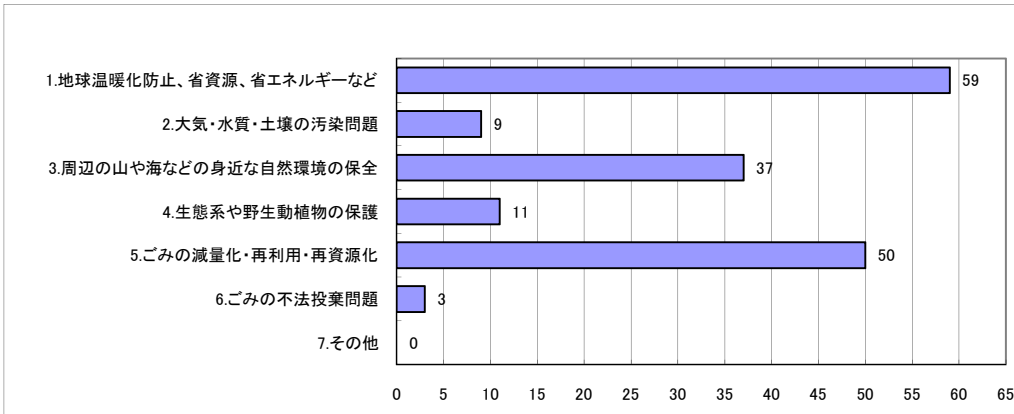
外部の協力を得ている学校が25校(32.5%)であった。

【設問3】

環境教育のテーマとして重要だと考える内容を、次の1～7の項目(グラフ参照)から2つまで選んでください。

◇N=86

「地球温暖化防止、省資源、省エネルギーなど」との回答が59校(68.6%)と最も多く、約7割に上った。次いで「ごみの減量化・再利用・再資源化」が50校(58.1%)、「周辺の山や海などの身近な自然環境の保全」が37校(43.0%)であった。具体的な活動として生徒が実践できるテーマが多く選択された。

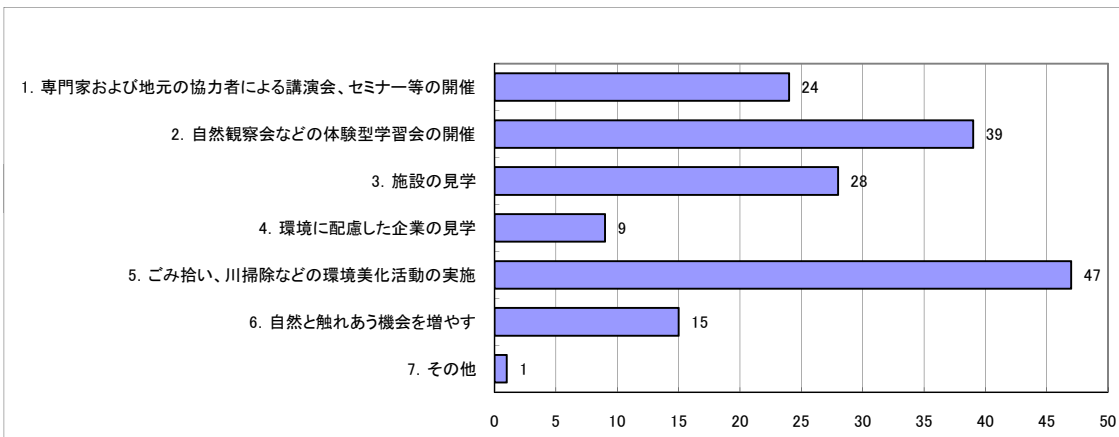


【設問4】

環境教育の実施内容として効果的だと考える内容を、次の1～7の項目(グラフ参照)から2つまで選んでください。

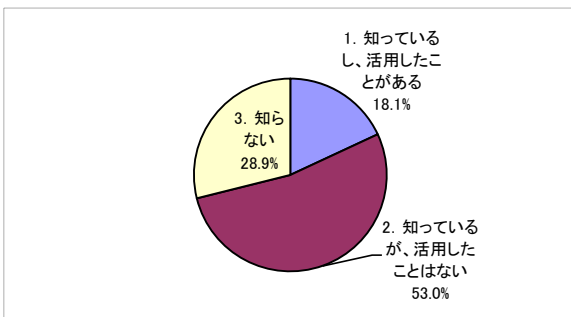
◇N=86

「ごみ拾い、川掃除などの環境美化活動の実施」との回答が最も多く、47校(54.7%)、次いで「自然観察会などの体験型学習会の開催」が39校(45.3%)、「施設の見学」が28校(32.6%)、「専門家および地元の協力者による講演会、セミナー等の開催」が24校(27.9%)であった。



【設問5】

(1) 行政や法人が行っている講師派遣制度を知っていますか？



◇N=83(回答校数)

「講師派遣制度を知っている」との回答は、59校(71.1%)で7割以上であったが、活用したことがある学校は15校(18.1%)にとどまっている。

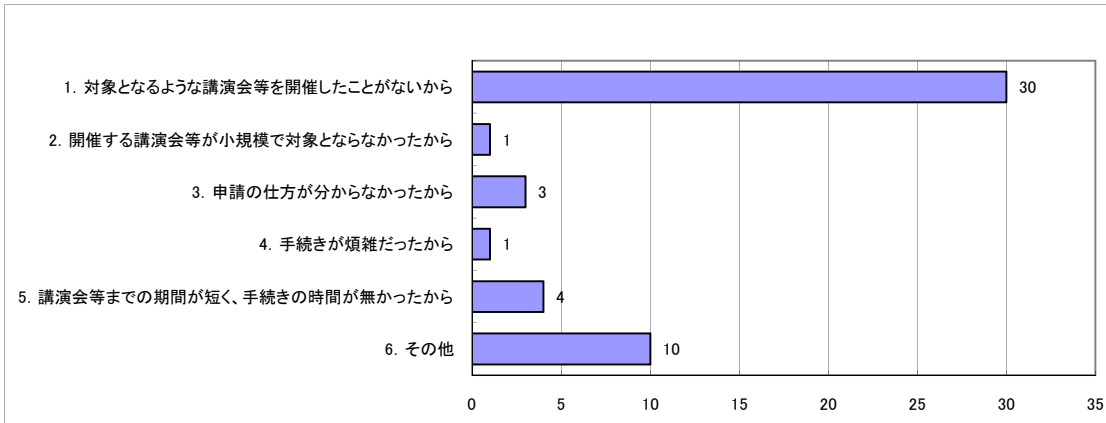
(2) 活用してみて、いかがでしたか？意見・感想をご記入ください。

設問5(1)で「知っているし、活用したことがある」と回答した15校に聞いたところ、「専門的な知識を活用しながらも、わかりやすく教えてくださいました」、「専門的な立場での意見が聴けた」、「資料が具体的でわかりやすかった」、「実体験ができた」などから、「生徒たちが意欲的に取り組めた」、「身近な環境問題としてとらえやすかった」など、高い評価が見られた。

(3) これまで、講師派遣制度を活用しなかった理由は何ですか？次の1～6の項目(グラフ参照)から選択してください。複数可。

◇N=44(設問5(1)で「知っているが、活用したことはない」と回答した学校数)

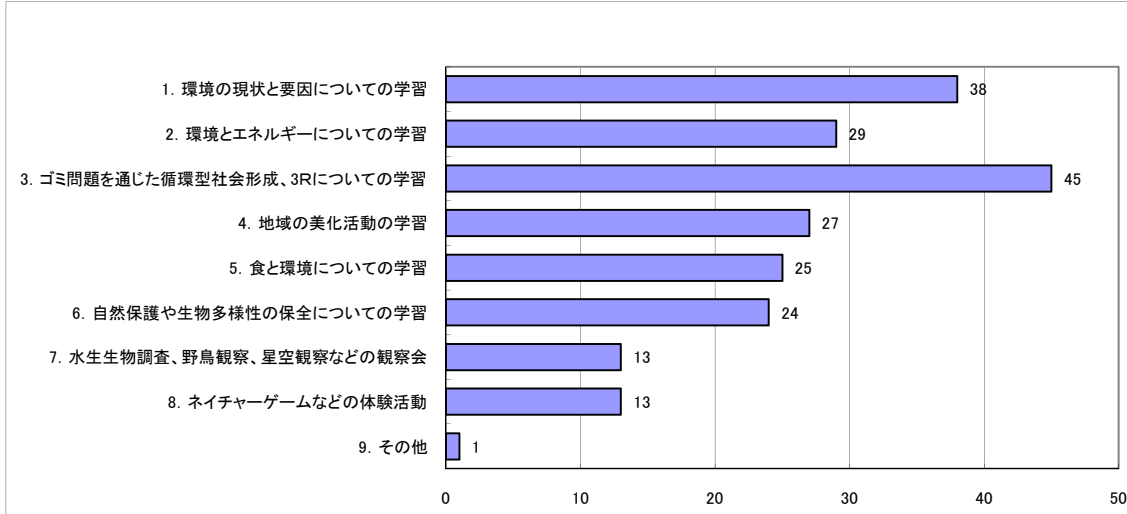
「対象となるような講演会等を開催したことがないから」が30校(68.2%)と最も多く、次いで「講演会等までの期間が短く、手続きの時間が無かったから」が4校(9.1%)、申請の仕方がわからなかったから」が3校(6.8%)であった。その他の回答が10校あり、「環境教育の系統だった計画がないため」、「授業のどこでどう生かすのが適切か見極められなかったから」、「前・事後の指導時間の確保が困難だから」など、どのように導入するのが適切か体制として判断し難かったという回答や、「時間やタイミングが合わなかった」などが挙げられていた。



(4) 講師派遣制度では、以下のような学習に無料で専門の講師を派遣しています。今後、活用してみたい分野はどれですか？次の1～9の項目(グラフ参照)から3つまで選んでください。

◇N=86

「ゴミ問題を通じた循環型社会形成、3Rについての学習」が最も多く45校(52.3%)、次いで「環境の現状と要因についての学習」が38校(44.2%)、「環境とエネルギーについての学習」が29校(33.7%)、「地域の美化活動の学習」が27校(31.4%)であった。1～8の項目それぞれに一定の関心が示された。



【設問6】

・貴校が取り組んできた環境教育の中で特徴的な取り組み
・貴校が環境教育を実践する上で、感じられている課題や改善点
等についてご自由にご記入ください。

■校内での取り組み

・資源ごみの分別、アルミ缶やプルタブ・ペットボトルのふた・紙の回収、節電、節水など省資源やリサイクルに関する取り組み、また、花壇の整備や校内の清掃等の美化活動に、多くの学校が取り組んでいる。

・生徒会や委員会が主体となっている場合も多く、生徒の自主的な活動と位置付け、定着化が進んでいる。1年生が中庭の花壇の世話を担当し、2年生になったら1年生に引き継ぐなどの伝統を作っている学校もあった。

・学校版環境ISOへの登録、学校行事への位置づけ、活動のタイミング(0の付く日はごみゼロデー、月に2回など)を決めて実施するなど、定着化・習慣化の工夫が見られた。

・「栽培したハーブを活用して野外トイレの防虫対策を企画した」、「エコ・チェック表を作成して、全校集会での発表と教室の掲示を行った」、「エコキャラクターを作成した」など、より能動的・効果的に活動を広げるための様々な工夫が各学校で実践されていた。

■地域との関わり

・美化活動については校内にとどまらず、通学路や公園の清掃、近くの海岸のごみ拾い、駅前の花壇の整備などを実施している学校が見られた。

・上記の中には地域の住民や環境保全活動を行う団体、保護者らと一緒に実施し、複数年にわたって継続されている活動も多い。

・美化に加え、海や川で回収したごみの調査、川の水質調査の実施もある。また、清掃後に生徒会だよりに取組みを紹介する記事を掲載し、地域全戸に配布して情報発信することにより、地域の問題として考えてもらうように取り組んでいる学校があった。

・回収したアルミ缶・プルタブによって得た収益で、車椅子を購入して特別養護老人施設に寄付したり、公園の花壇の苗を購入したり、エコバックの作成費用に充てて地域に配ったりという、地域に対してさらに貢献しようとする事例があった。

・地域行事への参加を積極的に行っている学校もあった。

・地域の自然環境に加え、史跡・遺跡なども含んだ地域の文化に総合的に触れる機会(探索など)を設け、地域への理解と関心、自然を大切にすることをねらいとしている事例も見られた。

■自然環境や動植物への理解

・海・川・森林などの自然環境が近くにある学校では、それらをフィールドとして、清掃活動のほかにも、森林や野鳥、川の生きものなどの調査や観察を行っている。森林のはたらき(水の浄化・保水作用など)を、森を歩きながら森林組合の人に詳しく説明してもらい、理解が進んだという事例があった。

・野菜の栽培を通して、食べるということが命をいただくことであることを体感し、食育にもつながっている事例があった。

■課題

・環境教育の時間の確保が難しいとの声が多数あった。そのために、行事や実施内容を精選し、実施につなげたいという動きがある。また、時間の確保が難しい理由として、環境教育に位置づけがあいまいであることが挙げられていた。

・環境教育のカリキュラムについては、系統だったカリキュラムが出来上がっておらず、各教科担当者やその部署の担当者任せになっている、職員間の意識の違いがある、3年間に渡って教育計画に位置づける必要性を感じている、科目間を通した年間計画が必要だが検討の時間の確保が難しいなどの課題が挙げられていた。

・学校施設整備や費用に関して、太陽電池パネル・小規模風力発電施設・雨水タンクを設置してもらえると実践によって生徒の意識が高められるし、地域の省資源に貢献できるなどの希望が数件あった。また、体験的学習を中心に行っているが、費用が保護者負担となっていることを心配しているという声があった。

・テーマの設定に関しては、周辺の環境を生かして生物調査・ごみの調査を行っているが、調査地域が限定されることや研究対象に多様性を持たせにくく、マンネリ化を懸念しているとの声があった。

・校外を越えた取組み体制については、「講習会や研修などを学校単位の自発的な取組みにするのもよいが、いくつか指定してもらって取り組めるようにしてもらえたらもっと意識が高まるのではないか」「個人や一つの組織(学校)だけでは取組みに限界があるので、ESD(持続可能な発展のための教育)との関連を視野に、環境教育の必要性の共有、時間の確保、先生方の研修などが進む体制の整備を」との意見があった。